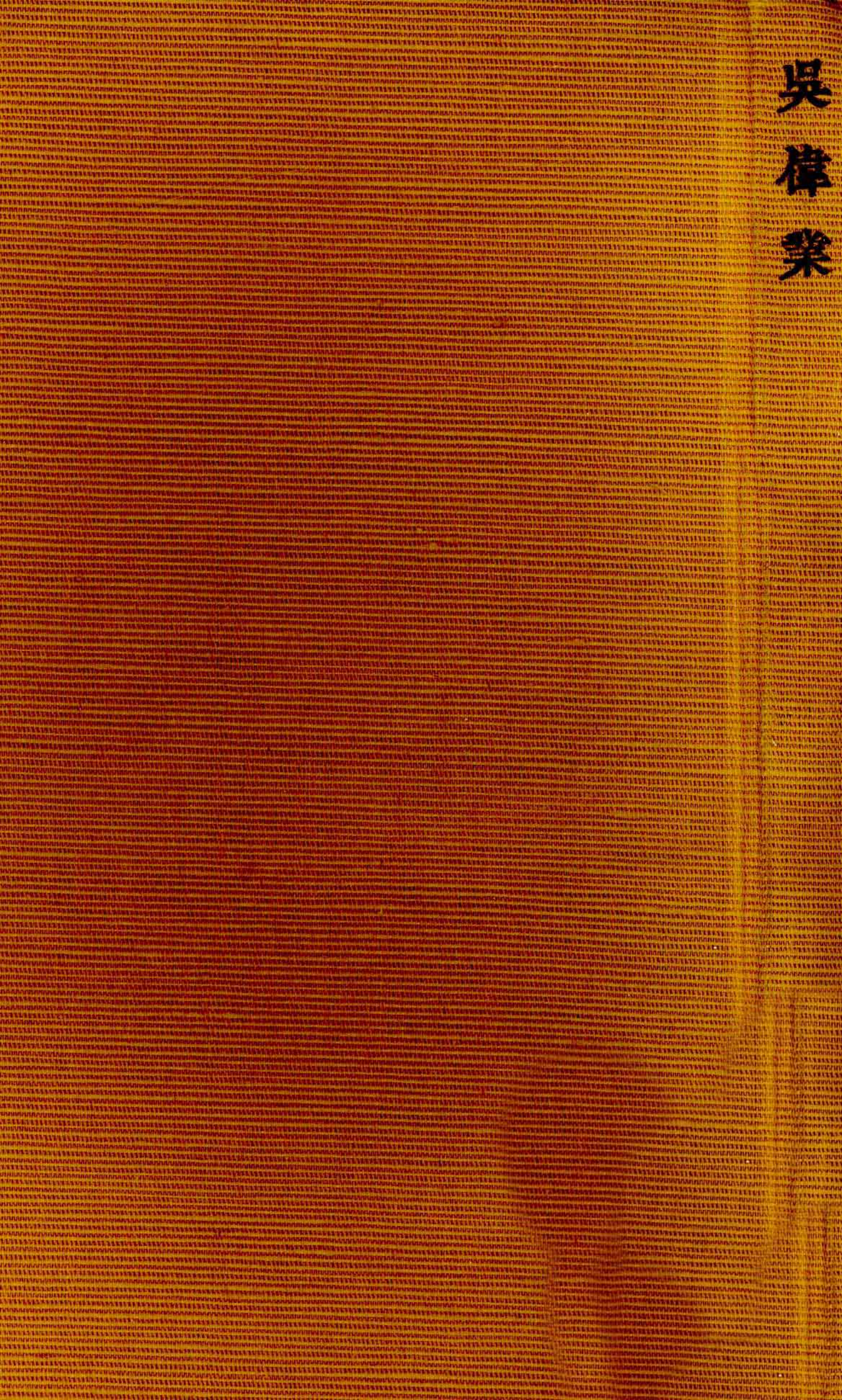


吳偉梁



吳 偉 業

福本雅一注

編集・校閲

吉川幸次郎

小川環樹

中國詩人選集二集 12

昭和三十七年六月二十二日 第一刷発行 ©

吳偉業

定価二二〇円

注者 福本雅一

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地

発行者 岩波雄二郎

東京都青梅市根ヶ布三八五番地

印刷者 山田一雄

発行所

東京都千代田区
神田一ツ橋二丁目三番地
株式会社

岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

解 説

一

呉偉業——梅村は、亡国の詩人である。古来、中国において幾多の王朝の交替を見た。そしてその時——多くは悲劇の時であった——にめぐりあわせた不幸な詩人も、恐らく無数である。しかし、敢えて言うなら、誰もこの梅村ほどに、滅び去った先朝を哀しみ、帰らぬ過去に傷心した者はない。

彼は少壮にして朝廷に立ち、その才華によって、輝かしい位置を約束された俊英であった。しかし、明末、国運漸く傾く日に生れ、人生の半ばに破局にみまわれて、彼の未来は挫折した。彼の友人たちは、或はレジスタンスに敗れ、或は俗世をのがれ、或は清に降った。梅村も、のち強いられて「武臣伝」中の人となった。「武臣伝」とは、明清革命の際、両朝に仕えた人たちの列伝をいう。

その間、彼は、故国を歎き、親友を悼み、自己を怨んで、多くの哀歌を作った。十八巻に収められる凡そ千首の詩はみな、今はなき明の追憶に結びついて歌われる。

梅村の生涯は、明の滅亡をその半ばに插んだ六十年であった。この時期は、ちょうど、嵐の海の暗黒の渦が、抗いがたい勢いで、あらゆる運命を捲きこみ、奈落の絶望へとつき落し、やがて、運命の破片を吐きすてながら、もとの静けさに立ちかえる——あの過程にも似ていた。そして、梅村は、ひとびとの去っ

た死の海に、なおも冷たく身を漂わしながら、この未曾有の悲劇の、ロマンチックな証人たらんと望んだのである。つまり、梅村の詩は、この嵐によってもたらされた、さまざまな悲劇に視点を集中して歌われたものであった。明清の革命の結果が、単なる王朝の交替ではなく、異民族の征服による支配であり、また、かの有名な薙髮令の侮辱を強制されたのちの屈従であってみれば、この際起った悲劇には、従来の歴史が経験しなかった、複雑な情況の起伏があった。亡国の臣が、先朝に捧げる挽歌ですら、ある抑制がなければならぬ。それ故、箕子^{きし}は、殷の廢墟に立ちつくして、ただ、

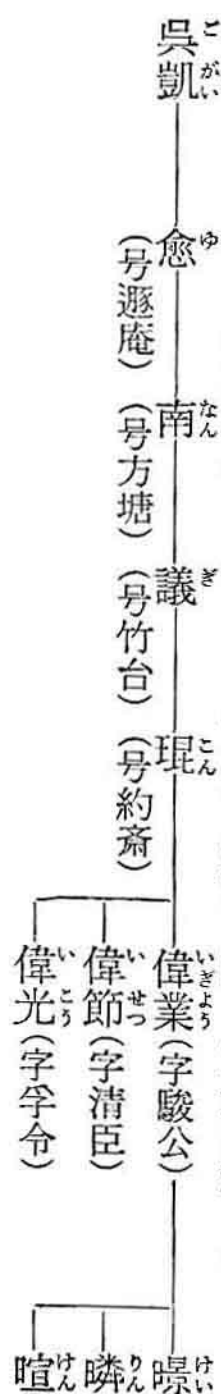
麦秀^{むぎひい}でて漸漸^{ぜんぜん}たり 禾黍^{かして}油油^{ゆうゆう}たり

と歌った。しかし、梅村は、詩人として更に困難な地点にあった。何故なら、国の滅亡に続いて、髮の名譽のために戦われた二十年があり、彼自身および彼の親友の多くが、この激烈な闘争に、若しくは闘争に附随して生じた混乱と紛擾に翻弄されて、或は坐礁し、或は難破したからである。梅村の詩が、史詩として高く評価されるのは、それが、先朝と自己への単なる弔鐘であるばかりではなく、このような情況を背景にもつが故に、影の部分へ追いやられてしまった歴史——当時においては重要な意味をもち、かつ公然の秘密でもあった諸事件と、微妙な接触を示すからにはほかならない。それ故、われわれは、梅村の史詩の複雑さを理解するために、まず、彼の履歷書と、当時の歴史に、目を注がなければならない。

二

吳偉業^{ごいぎよう}、字は駿公^{しゅんこう}、梅村^{ばいそん}と号し、江蘇省太倉^{たいそう}の人。明の万曆三十七年^{まんれき}（1609）に生れ、清の康熙十年^{こうし}（1671）に死んだ、六十三歳。父は吳琨^{ごこん}、母は朱氏^{しゅ}、先祖は鄰県崑山^{こんざん}の名族で、その中には、「吳中先賢伝^{ごちゆうせんけんでん}」に、良

吏として称された呉愈の名も見える。祖父の呉議の時、太倉に移った。



太倉は、揚子江の水が間もなく海を望もうとするあたり、肥沃なデルタの南の部分に位置する。東南より西にかけて、上海・松江・崑山・蘇州・無錫・常熟と、江南の、いわゆる呉の地方の豊かさを代表する、これらの町町にかこまれて、明代の太倉もまた、次第にその繁栄を築いてきたのであった。蘇州を中心として、この地方は、広く綿・絹織物の産地として発展し、塩商の町揚州を北にひかえて、天下にその富を謳われていた。

こうした環境に恵まれて、明の中葉以後、無数の文人が、ここに生れた。沈周(石田)・文徵明・唐寅(伯虎)・祝允明(枝山)・王世貞(弇州)・陳繼儒(眉公)・董其昌(玄宰)から、銭謙益(牧齋)に至る一群が、これらの文人たちの栄光の象徴であった。そして、彼等の主張や文芸上の成果が、それぞれに異ったものであったにも拘らず、自ら一致したのは、この呉の地こそが、中国の文化の中心であり、ここより生み出されたものが、その精華である、という誇りであった。明末から清初にかけて、これらの文人たちの最後的位置を占める梅村も、この、文化の真の体得者であり、具現者であるという信念を持ち続け、また、明が滅びてのちも、そうすることに無限の郷愁を抱き続けていたのであった。

吾が呉の儒雅は 当代を傾く
 石田(沈周)既に没するも 風流在り

待詔（文徵明）の聲華 晩に適に過ぎ

枝山（祝允明）の放達 長く害なわること無し

歲月悠悠として 習俗は非なり

江郷の礼数 時態に帰す 「卷七京江送遠図歌」

このような咏歎が、彼の詩にしばしば現われ、或は、無意識に投影されているのに、読者は出あうであらう。

梅村は、幼少の頃より鋭鋒をあらわし、数千言の文を、たちどころに成した。復社の盟主として盛名があった張溥は、彼の文を一見して、文学の正しい伝統は、幼ない君の中に備わっている、と歎息したという。

明末の詩文壇が、さまざまな主張に分裂して、悪罵と呪詛を投げあい、一方、科挙の受験のための八股文の習熟に、その精力を浪費しつつあった時、經学を根底とした古典主義をスローガンとして、内容ある学問を着実に進めようと志した人たちがあった。太倉の張溥・張采を中心として、江南の各地に、その参同者を得た、復社と呼ばれるグループがそれである。古学の復興を目的として名付けられたこの復社は、全国の著名な文学結社——その殆んどが、科挙に応ずるための、予備校的性格をもっていた——を統合する形で膨脹し、中央政府にも多数の同志を送りこんで、積極的に政治に参加しようとする姿勢を示していた。約二千三百名の人材を網羅した、恐らく史上最大の文学結社は、その後、国の滅亡と共に消え去る運命にあったが、この復社の人たちが、明末清初の政治・詩文・学術、或は抗清運動に発揮したエネルギーと、その影響は測り知れぬものがあった。

遂に天下の士を使って

咸な吾が徒の約を奉ぜしむ

詞場 兩呉に忝けのうし

相いと与に犄角を為す

煌煌たり張夫子(張溥)

斯文 濂洛を紹ぐ (濂洛は北宋の理学者、周敦頤・程顥等をさす)

五経 鐘鏞を叩き

百家 矩矱を垂る

海内 其の門に走り

鞍馬 城郭を填む 「卷一志衍を哭す」

崇禎初年の盛況を歌ったこの詩は、決して誇張ではない。

梅村は、復社の成立(崇禎二年)と同時に、その一員に加わり、四年には、師張溥と共に進士に及第した。榜眼(第二位の合格)の榮を得て、直ちに翰林院編修を授けられ、一躍天下に名を知られた。年わずかに二十三。異例の出世である。翌年には、時の崇禎帝より特別の優待を以て、結婚のため郷里に帰ることを許された。

崇禎八年、実録纂修官に任ぜられ、十年には東宮講読官となった。この頃、反動内閣の首相温体仁は、内政外政に積極的な改善策を掲げ東林党の後継者を自称する復社一派の活動と、鋭く対立しつつあった。梅村は、体仁の一味を弾劾し、また、帝の逆鱗に触れて流謫される黄道周の救解に尽力して、次第に正義

派の中で頭角を現す。やがて南京国子監司業に遷ったが、この間にも、危機は刻々と瀕死の帝国を脅かしつつあったのである。

崇禎十七年三月、明が北京で滅んだ時、梅村は郷里太倉にあった。彼は先帝の殊遇を想い、臣節を全うせんとして自殺を謀ったが、家人に覺られて果さなかった。間もなく、馬士英一派に擁立された福王が、南京で明の皇統をつぐべく即位すると、梅村は召されて少詹事となった。しかし、この臨時政府の内部では、三十年來の党争が、なお執拗に続けられていた。正義派を以て自任する東林や復社が、宦官派の馬士英・阮大鍼と合うはずはない。梅村は、いちはやくこの政權を見限って辭職した。翌年、即ち清の順治二年、すでに北中国を席捲した清の大軍は、大挙南侵を開始した。四月に揚州が陥ち、五月には、南京が降った。殆んど無抵抗のままに、江南一帯は平定されるかに見えたが、たまたま、清朝が中国人に強制した辮髮(額を剃りあげ、後ろ髪を結って垂らす満洲人の習俗)は、未曾有の混乱をまき起した。江南一帯が戦乱の巷と化して、莫大な流血が歴史に記録される。この時、梅村は、一族を率いて、蘇州の東南にある礬清湖に避難した。「避乱六首」(十八—二五ページ)は、このことを歌う。「其の五」に、

天塹 雄ならざるに非ず

哀しい哉 日に荒蕪す

嗟 爾 謀国の徒

坐して江山の半ばを失う

と痛歎するように、無能な朝廷が、この悲劇の責任者であった。この喪乱の際の追憶は、彼の詩に、怒りをこめて、しばしば歌われる。江南の兵火も漸く収まった頃、梅村は太倉に帰った。国が亡びた今、官途

を失った今、彼は何をすべきか。彼は極めて慎重に、将来を透視しようと努めたが、鮮明な映像は何一つその眼裏に浮ばなかった。やがて、梅村は、積極的に生きることと断念し、余生を、詩と山野の娛しみに見出だそうと決意した。

しかし、この決意は、十年と経たぬうちに清朝の強圧の下に潰え去った。順治十年、迫られて、北京に上り、国子監祭酒（大学総長）に任ぜられた。二年に満たぬ在任ではあったが、一族を犠牲にしてまでも、清朝に抵抗しようとしなかった梅村は、それでも、この変節を哀しんで、死に至るまで後悔して止まなかった。その頃、南中国の各地では、桂王（桂王）を中心とした抗清運動が、なお頑強に続けられていた。順治十六年には、鄭成功（鄭成功）の大軍が、揚子江を遡って、南京を殆んど破らんとする勢であった。この危機に際して、清朝が最も恐れたのは、江南の豪傑が明朝回復の旗の下に結集することであった。梅村の周囲にも、不穏な空気が漂い、緹騎（緹騎）の監視が鋭かった。彼は動こうとはしなかった。

順治十八年、ビルマに逃れた桂王が捕えられ、雲南の李定国（李定国）が死ぬと、台湾に拠る鄭成功一族を除いて、中国は漸く平和を回復した。

当時、梅村の詩名は、すでに天下に鳴っていた。そして彼は、世俗のあらゆる誘惑に背を向けて、ひたすらに、自己の情熱を詩に傾け尽した。彼の歌には、みな亡国の哀しい響きがあった。

私の詩は伝えるに足らないけれども、その中には、私の心の苦しみ、哀しみがこもっている、もし後の世の人が私の詩を読むなら、私の胸中を察して泣いてくれるだろう。「陳廷敬（陳廷敬）、呉梅村先生墓表」
と彼は呟いた。

梅村は自然の風物を愛し、山水に遊ぶのを好んだ。詩集にも、四季の変化に、微妙な興趣を見出したも

のや、呉の形勝を歌ったものが多い。彼は人生の後半を、太倉近郊の別荘の梅村（彼の号はここに由来する）で、田野の生活を娛しんだが、その中に歌われている自然は、みな、悲しみを想い起す媒介であり、或は、自己の憂いを和らげ、自己の諦めを慰める対象であって、そこに、素朴な歓喜や生命の躍動を見出すことは稀である。比喩的な表現が許されるなら、それは、沈まんとする陽であり、散る花であって、輝く光、燃える緑ではない。疾風急雨ではなく、風のためいき、雨のささやきであった。

落日 晴湖 棹を放って回る

故人 曾つて此に 登台を共にす

風流 頓に尽きて溪山改まり

富貴何ぞ常ならん 簫管哀し

燕は去りて 妓堂 荒蔓合し

雨は鈴閣を侵して 野棠開く

橈を停めて卻って望む 煙 深き処

記し得たり 当年 酒を載せて来るを 「卷十一 鴛湖感旧」

これは「鴛湖曲」（二八—三七ページ）と同時の作である。この傾向を知るに足ろう。

革命以後、薙髪令に抗した遺民たちは、多く家を捨てて僧となった。世の無常をはかなんだ梅村は、たえずこの誘惑にかられていた。残される家族を思つて、遂には出家を断念したのではあったが。「卷一 願雲師に贈る」の序に、

甲申（崇禎十七年、即ち明滅亡の年）変を聞き、嘗つて山に入らんと相い約す。予れ牽帥せられて果さ

ず。

而るに師は已に悟道す……書を貽りて予れに別れ、云う、兩人の年不惑を踰ゆるを以て、衰老漸く至る。世法は夢幻にして、惟だ出世の大事のみ、乃ち真実と為す。

と述べ、

流連す 白社の期に

慚ず 青山の約に負くを

君親に 既に愧ずる有り

身世 将た安くにか托さん

と歌った。彼の詩に僧との応酬の多いのは、如何に彼が、この俗世を逃れたいと希望していたかを、物語るものである。開卷第一に、「蒼雪(法師)に贈る」(巻頭の写真参照)という五言古詩が据えられているのも、故なしとしない。さればこそ、彼は死を前にして、私の体に僧衣を着せて葬ってほしい、と懇願したのであった。

明が亡んで三十年、節を誤って二十年が過ぎた。生来病弱であった梅村は、辛くも六十三を迎えた。挫折と齟齬の連続であった生涯をふり返って、こう言った。

吾が一生の遭際、万事憂危なり、一刻も艱難を歴ざる無し、一境も辛苦を嘗めざる無し、実に天下の大苦の人爲り。「家藏稿卷五十七子皦に与うる疏」

康熙十年の冬、病を得た。死んだのは十二月二十四日である。蘇州の西南にある鄧尉山の梅を、こよなく愛した梅村は、その山の靈巖寺のそばに葬られることを望んだ。武臣の汚名を後世に残すことを恥じた

のであろう。墓誌銘さえも、人に依頼することを許さなかった。墓前に、ただ、詩人吳梅村之墓

と刻した石を立てるように命じた。ひとびとは、泣いて遺言に従った。

三

高青邱(高啓)の後、有明一代、竟に詩人無し、末造(末世)に至って、精華始めて発越す。これは、「甌北詩話」に見える趙翼の評である。李夢陽・何景明等の前七子、李攀竜・王世貞の後七子によって代表される明の詩は、すべて、盛唐に詩の規範を求めようとした、復古主義の理念に基いて展開されたものであった。しかし、このような異口同音の主張は、少数の例外を除けば、ユニークな創造、興味ある屈折を示すこともなく、ただ唐詩の模倣に終始したまま、不毛と衰微への直進を続けた。趙翼のみならず、多くの批評家が、明初の高啓より、明末の錢謙益・陳子竜・吳偉業に至る二百年を、全く魅力に乏しい、空虚な喧騒の時代である、と認めた理由はここにある。

復古派の末流が、格調を尚ぶ唐人の風氣のみに共鳴して、読書を放棄し、模擬ばかりか剽竊すら辞せぬ、という墮落した安易さの上に腰を下していた時、指弾の一矢は、公安の袁兄弟によって放たれた。ついで、竟陵の鍾惺・譚元春が、幽深孤峭を標榜して起った。最後の痛撃を加えたのは、明末の詩壇に君臨した錢謙益である(この間の経緯については、本選集「袁宏道」に於いて詳説されるであらう)。しかし、これらの攻撃に対して、復古派は、沈黙したままに打倒されたわけではない。例えば、陳子竜は、自己の指導する文学結社・幾社を率いて奮闘したのであるが、このような抗争の間にあって、梅村は殆んど何ら注目

すべき発言を持たない。これは、当時においてむしろ奇異な例外である。しかし、彼が錢謙益に対して批判的であり、尊敬する先輩が同里の王世貞であり、また健全な意味での復古運動を推進した復社の一員であることなどから考えて、彼が、復古派の陣営に属すべき詩人であることは明かである。

浮雲落日等の唐詩の慣用句を、適宜に組合わせたものが、七子的復古派の詩だ、と錢謙益などが揶揄しているが、梅村の詩にも、類似の現象がよく見られる。彼の愛用するのが、秋風落日、長笛哀歌、江湖放舟、等の語句であってみれば、この事は肯定され得よう。それと関連して、梅村詩の重大な欠陥は、同一文字を、同一詩中に、実に何度も反覆することである。「鴛湖曲」(二八ページ)に例を求めよう。湖畔・湖辺・満湖・南湖・江湖の湖字五度、煙・風各四度、柳・雨・樹各三度、草・月・好・驕・船・桃・天・葉各二度、が重複して用いられている。杜甫とほならば、このような無神経を恥じて死んだであらう。しかし、梅村の詩は、非常に巧緻に、かつ柔滑に構成されているので、この欠点を、何の抵抗もなく、殆んど気付かぬままに読み過してしまふ。また、押韻の上でも、二韻を通用したものや、同字を重押した場合もしばしば発見される。

復古派が、唐詩を学んで粗豪に堕し、加えて全く含蓄に乏しい無学な詩を作ったのを反省して、錢謙益等が宋詩に範を求めようとしたのに対し、梅村は漢魏六朝の詩文に熟す——といわれるように、彼は、その用語と典故を六朝に求めて、新生面を打開しようと試みた。彼の詩に、六朝風のプレシオジテが感じられ、婉麗な、きめこまかなデリカシーを以て、女性的な感性を歌うことに秀れているのは、この技巧と効果こを学んだからにほかならない。「四庫全書總目提要」には、

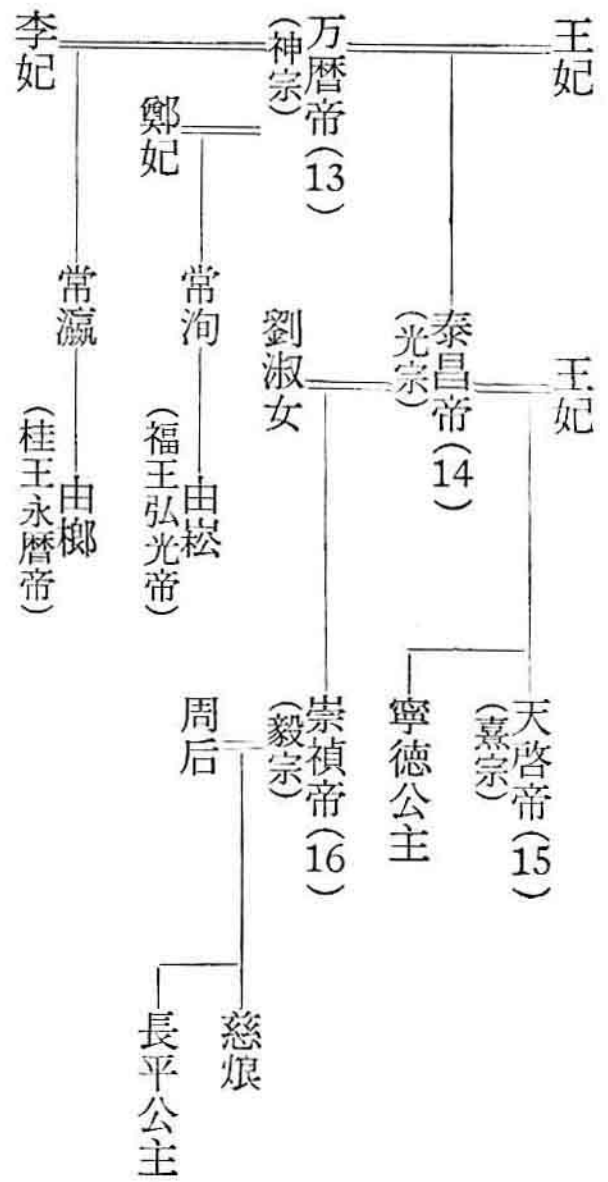
格律は四傑しけつに本づき、而して情韻は深しと為す、叙述は香山こうざんに類し、而して風華は勝れりと為す。

と評されているが、これは、六朝詩が殆んど五言であるのに対し、梅村の古詩が七言を主とするので、初唐の四傑に本づくといいい、また、非常に長篇の叙事詩が多いことから、白居易の「長恨歌」や「琵琶行」に類す、といったのであろう。事実、彼の古詩は、「卷一何省齋を送る」「卷二禁清湖」等、それぞれ、一千字、八百八十字、明の詩に例を見ない大作であり、六十句、八十句の作は、ごく普通である。このことは、叙事詩のもつ必然の傾向である、と認めても、詩自身のもつ本能——美しく結晶しようという欲求が、梅村の叙事詩にあっては、いくぶん稀薄になつてゐるよう感じられる。そして、一つ一つの詩句や発想にも、新鮮な独創はむしろ少なく、むしろ、使い古され、老衰したものである、といつてよい。それでは何故、梅村の詩——特に史詩が、魅惑的であると意識されてきたのであろうか。それを追求する前に、我々は、彼の史詩の背景をなす、明末清初——十七世紀前半の憂鬱な歴史を回想しなければならぬ。

四

十六世紀もやがて終ろうとする頃、明は万曆帝まんれきの治世(1573—1619)であつた。名相張居正ちやうきよせいが死んで、ようやく衰兆を呈しつつあつたこの帝国は、突如、豊臣秀吉の侵略を朝鮮に受けた(1592—1598)。前後七年にわたる戦乱と呼応するかのよう、西では倭寇ほはいの乱(1592)、南では楊応竜やうおうりゆうの乱(1597—1600)が起り、蕩尽した莫大な戦費のため、明の国勢は大きく傾いた。

万曆帝は、皇后に嫡子じきうしがなく、王貴妃と鄭貴妃ていきひに、それぞれ王位の候補者をもつた。帝は鄭貴妃への愛に溺れて、彼女の生んだ常洵じやうじゆんを皇太子に擬してゐた。



鄭妃の方でも、宦官を中心とする宮中の諸勢力と結托して策動を試みると、閣僚の間にも当然激しい対立が起った。

これより先、政争に敗れて野に下った顧憲成は、郷里の無錫に帰って、東林書院を興し(1604)、講学に従事するかたわら、政治を批判して、江南の知識人を広く組織しつつあった。

鄭妃の宮廷派に対して、長子相続を主張したのは、この東林党であった。事態の紛糾を憂えた帝は、長子(のちの光宗、即ち泰昌帝)を、後継者に指名し、常洵には、洛陽に四万頃という広大な所領を与えて、福王に封じた。

かさなった戦乱と、宮廷の浪費とで、財政に破綻をきたしたままに、万曆帝が崩じた時、あい前後して、所謂明の三案が起った。

三案とは、およそ次のような事件である。張差という男が、棍棒をもって東宮へ潜入し、皇太子を殺そうとして捕えられた。皇位継承に敗れた鄭妃一味の陰謀であったらしい。(梃撃の案) 万曆帝を継いだ泰昌帝は、即位後わずか一カ月で病を得、典医の資格もない李可灼りかしやくという者の調合した丸薬をのんで急死した。責任問題について議論が沸騰し、收拾がたい混乱となった。(紅丸の案) その直後、李選侍りせんじという女官が、皇太子を擁し、宮廷勢力を背景にして、朝政を専擅しようとした。楊漣ようれん・左光斗等さこうとの東林に属する人たちは、激しい抵抗を排して、選侍を正殿より移すことに成功した。(移宮の案) 「銀泉山(一〇〇—一〇七ページ)」注、「移宮の事蹟 更に茫茫たり」の中の詩は、その事件に関連して梅村の歌ったものを指す。

この三案を契機として、東林党と、宦官と結んだ反対党との死闘は、互に禍根を残しながら展開することになる。

このような難局に登場したのは、皮肉にも明代随一の暗君といわれた天啓帝てんけいであった。彼は政務をすべて宦官魏忠賢ぎちゆうけんに委託した。時を得た宮廷勢力は直ちに反撃にうつり、東林党を一網打尽にして惨殺した。各地にあった東林系の書院は破壊され、言論は弾圧されて、暗黒の七年が始まった。

宦官たちの哀惜のうちに天啓帝が崩ずると、弟の崇禎帝すうていが立った。英明な帝は、忽ち忠賢一派を肅清し、再び東林の殘党を起用して国勢の挽回を試みた。瓦壊せんとする帝国を支えて、彼は最後の十七年を苦闘する。

十六世紀の後半、満洲東部一帯に、女直族ジュルチが起った。ヌルハチという英傑に率いられて、次第に明を脅威する存在となりつつあった。万曆四十六年(1618)には、撫順近くのサルホ山で、明の大軍に殲滅的な打撃を与えた。遼河の線を確保するために、秀れた將軍がつぎつぎに任命されたが、いずれも、党争に禍い